

藤田 昌子 重木 優 樋口 倫代 江崎 留奈 日浦 希

徳島赤十字病院 ICU

要 旨

【はじめに】ICU入室中の出来事を記録した ICUダイアリー（以下ダイアリー）は、心的外傷後ストレス障害発症を減少するといわれている。【目的】ダイアリーを用いて入室体験を回想することにより、患者の体験、心理状態、看護の状況を明らかにする。【方法】対象：A病院ICUに3日以上入室した20歳以上の患者5名。調査方法：退室1週間後に半構成的面接を実施した。分析方法：発言の意味を損なわないよう入室中の記憶の欠落や非現実的な体験、回想による患者・家族の心理面の変化、ケアに関する発言を抽出した。【結果】全員に記憶の欠落と非現実的な体験が認められた。4名は、回想により非現実的な体験の矛盾に気づき欠落していた記憶を再構築することができた。現状認知を促す言葉かけや日常生活援助は、安心感を生んでいた。【考察】ダイアリーを用いた回想を行うことは、ICUでの体験の矛盾に気づき、記憶の整理・再構築に繋がったと推測される。

キーワード：ICUダイアリー、退室後面談、記憶の欠落、非現実的な体験

I. 目 的

ICUに入室した患者は、入室中の強い苦痛や深い鎮静によってICUでの出来事に関する記憶が欠落していたり、反対にせん妄発症時のことをICU退室後も鮮明に覚えていたりすることがある。このような記憶の欠落や非現実的な体験は患者の内面に強く残存し、ICU退室患者の5-63%が心的外傷後ストレス障害や急性ストレス障害を発症し社会復帰の妨げになっていることが報告されている¹⁾。

こうした患者への看護ケアとしてICU入室中の出来事を情報提供するICUダイアリー（以下ダイアリーと称する）という試みがある。看護師とともに退室後にICUでの出来事をダイアリーを用いて振り返ることで、患者の記憶の再構築を助け、集中治療後のPTSD発症を減少、長期的な患者のQOL向上、患者だけでなく家族への心理的ケアになるといわれている²⁾。

本研究の目的は、ダイアリーを記載したICU退室後の患者を対象にICU入室中の体験を回想することにより患者の体験や心理状態、看護の状況を明らかにすることである。

II. 方 法

1. 研究デザイン：実践報告

2. 用語の操作的定義

記憶の欠落：ICU入室中の記憶の全部または一部が抜け落ちること。

非現実的な体験：ICU入室中に現実では起こりえないことを体験すること。

ICUダイアリー：担当看護師がICU入室中の出来事について支持的な表現やイラストを用い、ありのままに毎日記載した記録。

3. 対 象

対象：A病院ICUに3日以上入室した精神疾患、高次脳機能障害のない20歳以上で本人もしくは家族に同意が得られた5名の患者。

4. データ収集期間

2018年9月6日～2018年11月8日

5. データの収集方法

ICUに3日以上入室した患者を対象者として、ICU退室後1週間を目安に、ダイアリーを用いて半構成的面接法に則った面談を行った。

診療録からは対象者の基礎的情報を収集した。

1) 診療録からの情報収集

対象者に関する基礎的情報（性別、年齢、病名、ICU入室区分、平均在棟日数、APACHE II（重症度評価と予後予測：2nd version of the Acute Physiologic Assessment and Chronic Health Evaluation）、延べ挿管時間、鎮静薬投与延べ時間）を得た。

2) ダイアリーを用いた面談調査

作成したインタビューガイドおよびダイアリーを用いて回想を行った。入院までの経過、ICU入室中の記憶と体験の内容、ICU退室後から現在までの体験や思いについて語ってもらった。面談の内容は、対象者の許可を得て録音した。

3) 分析方法

(1) 診療録調査のデータ

対象者に関する基礎的情報を単純集計し、それぞれ平均値と値の範囲を示した。

(2) 面談調査のデータ

面談の録音内容を逐語録とした。

(3) 分析方法

個別分析では、対象者と家族の発言の本来の意味を損なわないように面談をした研究者の意見を重視して意味を抽出した。全体分析は、個別分析で得られた情報の共通点や特徴を、以下の内容に沿って要約し抽出した。

①患者もしくは家族のダイアリーの評価に関する発言

る発言

②ICU入室中の患者の記憶の欠落や非現実的な体験

③研究者との回想による患者・家族の心理面の変化

④ICU入室中の看護師の言動、ケア内容に関する発言

Ⅲ. 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、徳島赤十字病院倫理委員会の承認を得た。対象者には研究目的や内容、手順、研究参加の自由、面談時間、面談時の録音の許可、中断の自由性、プライバシー保護、個人情報保護、結果の公表について書面と口頭で説明し、文書により同意を得た。面談調査では、心理的負担とならないように配慮した。また本研究は利益相反関係にある企業等はない。

Ⅳ. 結 果

1. 研究対象者の概要

研究期間中の対象候補者9名のうち、1名は面談を希望せず、3名は病状が悪化し、最終的に5名が対象となった。対象者の概要を表1に示す。対象者への面談は、研究者2名が、ICU退室後平均8.8日に平均32.2（range 23-41）分かけて入院病棟で実施した。

表1 対象者の概要

(n = 5)

属 性	A	B	C	D	E
性 別	男性	男性	女性	女性	男性
年 齢	74	66	82	84	35
疾 患	敗血症性 ショック	急性心筋梗塞 CPAOA	高エネルギー 外傷	下部消化 管穿孔	敗血症性 ショック
ICU滞在日数	8日	9日	6日	4日	6日
気管挿管の有無	有	有	無	有	有
気管挿管有無	92.8時間	127.4時間		73時間	116時間
鎮静時間	91.5時間	127.4時間	0時間	78.9時間	113.7時間
APACHE IIスコア	22	37	26	31	31
退室後面談までの日数	5日	12日	13日	10日	8日
面談時間	24分	41分	41分	23分	30分

2. ICU入室中の記憶と体験の実態

1) 患者もしくは家族のダイアリーの評価

ダイアリーを見て「記憶がないから、いいと思う」「うわ、綺麗、ありがとう、えーもったいない」「本当にこんなに綺麗に出来るんですね」等の発言があった。

2) ICU入室中の記憶の欠落や非現実な体験の実態

入室中の体験を尋ねると4名が「とにかく記憶がない、覚えていない(A, B, D, E氏)」と述べた。非現実的な体験は、ほとんどが回想前に語られた。「ずっと犬がいる、空調設備の中に映ってる。立体駐車場に居て、ナースがテーブルを囲んでいた。(B氏)」「自分が消えていくみたいな、目をつぶったらどんどん下に落ちていく感覚、目閉じたくない、自分が割れて行って怖かったですね(E氏)」「飛んでいる夢みた、降りてきてぱっと消えた。(D氏)」「ICU行ってすぐに、外科の先生だったかな、ベッドで寝ていたら足元で薬みたいなものを置いて、枕を置いてドカーンと飛び上がった。バウンドした時に骨がバラバラになったのかと思うくらい、足もと見たら煙みたいな湯気みたいなものがふわっとなって爆発のような(C氏)」と述べた。

3) ダイアリーを用いた回想による心理状態の変化

回想後に「本当に器械だらけだったんですね、ずっと気になっていたことが解決した。よかった。合ってる場所もあったし、面白いなあ、帰ったら何しようかな、ポンカン作りに行こうと思っているから、できたら持って来てあげたい(B氏)」「ほっとした。ICUでの自分の様子を知らなかったから、記憶が抜けていた部分がわかって嬉しいです。たくさん迷惑かけたと思う。(挿管のイラストを見て)こんなチューブが入ってたんですか(E氏)」と述べた。C氏は「(爆破されたことの原因を)悪くても良くても、言ってくれたら納得できるけど、それが治療のために必要だったと、ちゃんと言ってくれたら」と述べていた。回想後も非現実的な体験と捉え直すことはなく、その爆破が原因で骨がバラバラになったという体験を信じていた。

E氏は面談の同意を得る段階から、家族の同

席を望んだ。「3回くらい(自分で)点滴抜いたけど覚えてない、今考えたらありえないじゃないですか。医療の人にも家族にも迷惑をかけたと思う」と発言があった。妻は「(幻視で)見えていたのをムービーで撮っていた、それを知ったらどうなるかと思って言わなかったけど見た?」と対象者に質問していた。

4) 看護師の言動、ケア内容に関する発言

ICUでの現実的な体験の記憶は少なかったが「足をしめつけるのと、鼻のが死ぬほど嫌だった(A, C氏)」と述べ、間欠的空気圧迫装置やハイフローセラピー機器等の苦痛は強く記憶していた。看護の状況については「ICUは親切で優しい雰囲気でした(D, E氏)」「目が覚めたら演歌が聞こえて、頭もとにラジオみたいなのがあった。声が出なくて、どうしたんだろうと思っているときに、管が抜けたら声が出るって言ってくれた(D氏)」「髭剃って、髪洗ってもらった。歯磨きもしてもらった(E氏)」「などの日常生活援助や環境整備、現状認知を促す言葉がけが嬉しかったと述べた。

V. 考 察

1. 記憶の欠落と非現実体験について

5名全員に記憶の欠落があり、はっきりした記憶があるのは病棟に出たからと、記憶力の回復に時間を要していた。その要因として、5名とも緊急入室で、心の準備がないまま突然侵襲的な治療が開始されていたこと、APACHE IIスコア平均29.4点(25-29点の院内死亡率:非手術例51%,手術例37%)と重症度が高いこと、延べ挿管時間、鎮静薬投与延べ時間が長いこと等、濃厚な集中治療を行っていたことがあげられる。過鎮静は、記憶の欠落や妄想的記憶に影響を及ぼし、精神的なショックやストレスは、海馬が関係する短期記憶を破壊するといわれていることから³⁾、対象者にも同様の記憶の欠落や妄想的記憶が見られたと考えられる。

非現実的な体験については、面談が入室中の時間的経過を整理し、欠落した記憶を補填・再構築する助けになった。B, E氏と、ならなかったC氏に焦点を当てて考察する。

B氏は、詳細な非現実的体験の記憶と正確な記憶が混在しており、「真偽を確かめたかった。ICUでの経験を語りたかった」と研究者の訪問を歓迎した。面談後も自身の記憶と「一致するところがあって楽しかった」と語り、満足したような発言が聞かれた。

E氏は、面談において家族の同席を望んだ。これは体験を一人で振り返ることへの恐怖心や「迷惑をかけた」という気後れによるものと推察される。E氏は、転入前から幻視・幻覚があり、幻視で捉えた状況を撮影する等の行動を繰り返していた。面談中にICU入室前の状況を思い出し「今思うとおかしいことだった」と受け止めることができていた。この背景には、ダイアリーによる回想を丁寧に行いながら研究者が「幻覚はICU入室者にはよくあることで、E氏だけに限ったことではない」と伝えたことが影響しているとも考える。つまりE氏は、様々な記憶のゆがみを持ちながらもダイアリーを用いた回想を行うことでICUでの体験の矛盾に気づき、現実と区別することで記憶の整理・再構築に繋がったと推測する。

福田ら⁴⁾は「歪んだ記憶に対する早期介入は、患者がICUのケアと励ましを理解する上で非常に有用であり、精神的苦痛を迅速に低減することができ、社会に戻ることを容易にする」と述べている。B・E氏は、面談によって体験の真偽や時間的経過を整理し、欠落していた記憶を補って・再構築することができたと考えられる。

一方、C氏は、入室時の被害的体験を繰り返し語り、その行為の意図を知りたいと望んだ。研究者は、そのような被害感情を抱えたまま生活を送ることは心的外傷ストレス障害の発症に繋がる危険性があると考え、C氏の言葉を否定せずに当時の状況を伝えた。しかし体験したと語る記憶が非現実的なものであると受け入れることには繋がらなかった。

その理由として、C氏が交通事故後に不安と強い苦痛を感じながら搬送され、検査台やベッドへの移乗等で少なからず身体への衝撃を体験した可能性があった。また「爆発する」等の体験を繰り返し語り、根拠を尋ねたことは、その理不尽な体験に何らかの意味づけをしようとす

る対処規制であったと思われる。しかし、そのたびに体験そのものを否定されたことで、理解されない失望感を味わい、体験の矛盾に気づけなかった結果、記憶を再構築することができなかつたと考えられる。

山内⁴⁾は「妄想状態にある患者にとって妄想を否定されることは、確固たる信念を崩される脅威であり、むしろ不安を高める。その体験に寄り添い内容ではなく訴える感情を理解し穏やかに反応することが重要である」と述べている。今後は、非現実的な体験を語る場合には、あからさまに否定せず体験に寄り添う姿勢が重要と考えられる。さらに病棟看護師や多職種とも対象者の思いや体験について情報を共有し、統一した支持的な支援を実施することが必要と考える。

2. 退室後の面談の重要性

対象者は、非現実体験について、回想前から積極的に語っていたことから、体験を安心して語ることでできる機会を欲していたと推測される。E氏夫妻は、面談をきっかけに、幻視の動画撮影について語りあうことができた。打ち明けられなかった思いを吐露できた事は、患者だけでなく妻の心理的負担軽減にも繋がったと考える。回想後には、集中治療を乗り越えた安堵感や健康回復に向けての前向きな言葉が聞かれた。

木下⁵⁾は「ICU退室者は、入室体験を乗り越えるための対処法として、体験を否定されずに語りたいと望み、出来事の説明を求め、家族や他者からの情報を自分の記憶と照合する」と述べている。面談時に看護師や家族から入室中の出来事について説明を受け、記憶を補填することは、患者自身が非現実的体験の記憶の矛盾に気づく効果がある。そしてその気づきが、入室による混乱や不安などの精神的な問題を解消させ、前向きにその後の生活をイメージするきっかけになったと考える。

3. 看護ケア状況の記憶

看護について詳細には記憶していないものの看護師のケアがよかったという漠然とした記憶が残っていた。現状認知を促す言葉かけや丁寧な日常生活援助は、対象者にとって安心感を生

む材料になっていた。これらは、ほぼ記憶がない中でも特に記憶に残っていたことから、人格を尊重した言葉かけや心を込めたケアは、様々な喪失体験をしている重症者を力づけると考えられる。

Ⅵ. 結 論

1. 対象者全員に記憶の欠落と非現実体験があったが、現実の記憶も部分的に混在していた。
2. ダイアリーを用いた面談は、時間的経過を整理し、欠落した記憶の補填・再構築の助けになった。
3. 現状認知を促す言葉かけや丁寧な日常生活援助は、対象者にとって安心感を生む材料になっていた。

Ⅶ. おわりに

本研究は、条件を満たす被験者数が少なく、A病院ICU退室者5名を対象としているため、一般化には限界がある。今後は、ICUダイアリーを用いた退室後面談の症例を重ね知見を集積していきたい。

Ⅷ. 利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反なし。

文 献

- 1) 卯野木健, 櫻本秀明, 花島彩子: ICU退室後の神経精神障害 外傷後ストレス障害と認知機能障害. 日集中医誌 2010; 17: 145-54
- 2) Fukuda T, Inoue T, Kinoshita Y, et al: Effectiveness of ICU Diaries: Improving "Distorted Memories" Encountered during ICU Admission. Open Journal of Nursing 2015; 5: 313-24
- 3) 杉島寛: ICU退室後の生活を見据える PICSの予防と対策(第10回)ICUダイアリー. 看護技術 2017; 63: 1093-7
- 4) 山内秀樹: 心臓手術を受けた患者の回復過程におけるICU体験とICU退室後の記憶の様相. 東京女医大看会誌 2016; 11: 1-11
- 5) 木下佳子: 記憶のゆがみをもつICU退室後患者への看護支援プログラム開発とその有用性に関する研究. 日クリティカルケア看会誌 2011; 7: 20-35

Effects of interviews post discharge from ICU on patients using an ICU diary

Masako FUJITA, Yu SHIGEKI, Michiyo HIGUCHI, Runa EZAKI, Nozomi HIURA

ICU of Tokushima Red Cross Hospital

【Introduction】 Maintaining an ICU diary (hereinafter referred to as “diary”) to record events during ICU admission is said to reduce the incidence of post-traumatic stress disorder. **【Purpose】** The patients’ experience, psychological state, and nursing situation were clarified by using the diary to recall the experience of admission to ICU. **【Method】** Subjects: A total of 5 patients aged over 20 years who were admitted to the ACU ICU for more than 3 days participated in this study. Survey method: A semi-structured interview was conducted one week after discharge from ICU. Analysis method: We extracted comments related to postoperative memory loss and sense of unreality during admission, recollected changes in the psychological aspects of patients and families, and care by trying not to impair the meaning of the comments. **【Results】** All participants had memory loss and experienced a sense of unreality. Four were able to reconstruct the missing memories by recollecting the inconsistencies in the feeling of unreality. Words of encouragement and daily life support by nurses that promoted recognition of the current situation created a sense of security in participants. **【Discussion】** It is speculated that the recollection using a diary led to the reconciliation of the memory by recognizing inconsistent experiences in the ICU.

Key words : ICU diary, post-discharge interview, memory loss, feeling of unreality

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 25 : 54-59, 2020
